



（二人は大丈夫でしょうか…、
私のような状態であればいいのですが…。）

アイシャとレントと別れて進んだ通路の途中で
謎の発光を受けた後の異変。

カルミアの右腕以外の装備が全て消失し、
肝心の左腕のアニマウェポンが起動しないのだ。
それならばと右腕の装備を確認したのだが…。

カルミアのアニマウエポン、タウゼントは基本的には中々遠距離射撃を得意とするアニマウエポンである。

なのでそれ以外の状況に対応する為カルミアの体の各所には様々な装備が内臓されている。

特に右腕にはそれが集約されており、マシンガン、様々な弾頭のグレネード、ブレード、ワイヤーガン等、それら全てが対マーゴ仕様の特別製でそれだけでもマーゴと渡り合える代物なのだが……。

（2人と合流できるまで、何とか凌がないといけませんね。）

現在使用できる武器は肘に内臓されたブレードのみだった。

そんな最悪の状況なのだが、

カルミアは

2人が自分より大変な状況でなければいいな。そう思いながら通路を進んでいった。

通路を進んだ先にあった扉、警戒を怠らずその扉を開ける。

その部屋は何かを製造していたのか、何やら普段は見かけない機械類が

並んでいたが、長らく使っていないか、その殆どが大量のほこりや汚れを被っていた。

雨漏りもしている為か、赤茶けた錆に包まれたものもある、

更にそこから流れ落ちた水が床に落ち、部屋の中々に赤茶色の水たまりが生まれていた。

そんな部屋の天井部分、そこで蠢く物にカルミアは注視する。

それは銀色の巨大な百足に人間の頭蓋骨が付いているという不気味な形状をしていた。

カルミアが一步前に進むと動かなかった、昆虫の足が蠢き

昆虫が警戒するような反応を見せる、同時に觸體の額に埋め込まれた青い球体が光る。

（…この感覚は…体に影響は無し、解析用の魔眼のようなものでしょうか。）

光に奇妙な視線を感じるカルミア、その感覚には覚えがあつたのだが、現在カルミアは能力の大半が使用出来ない状態で、確かめようにも左目の義眼の解析能力も使えない。

（とはいえ、あまり探られるのはいい気分ではないですね。）

直接の影響が無いとはいえ、このまま放置というわけにもいかない、かといって銀色の觸體はこの部屋をすんなり通してくれるかと言えばカルミアが少し移動するだけで警戒を露わにする銀色の觸體の動きからそういう雰囲気では無い。

カルミアは右腕の装備を起動させ、行動に移ろうとした、

その時――。

（これは……!!？）

右腕の装備を起動した瞬間、
赤茶けたスライムの様なモノが
右腕に巻き付いてきた、

引きちぎろうとするがその力は強く、
簡単にはちぎれない。

「ええっ!?!」

カルミアは更に力を込め
無理矢理引き剥がそうとすると、
先程まで錆が混じっていた
水たまりだと思っていた所から右腕に
絡みついているスライムと同じものが
カルミアに殺到していく。



「うん...うん」

グエッ!!

ギョッ

ギョッ

ゴッ

グエ...



「うーん……うーん」

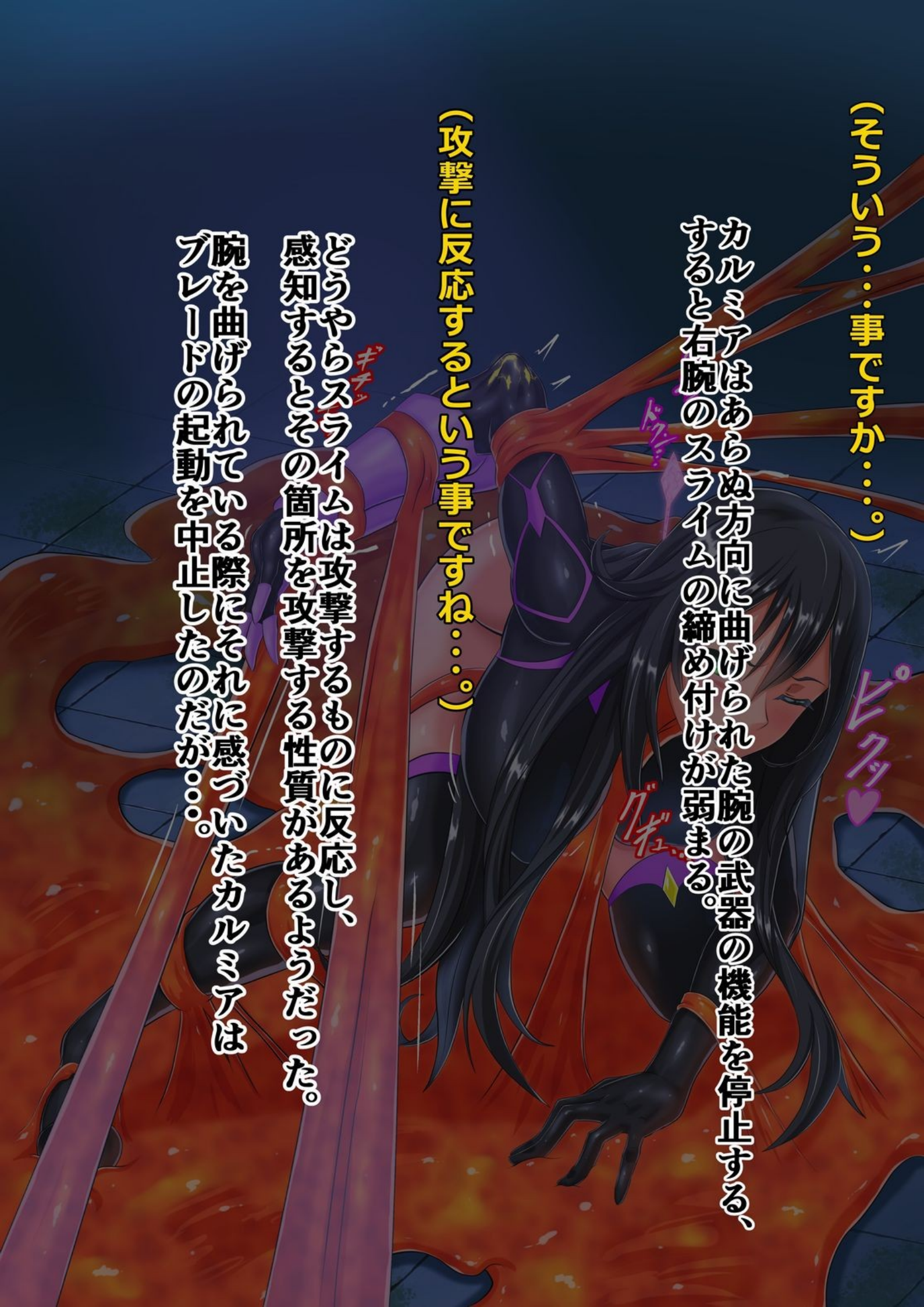
（そういう・・・事ですか・・・）

カルミアはあらぬ方向に曲げられた腕の武器の機能を停止する、すると右腕のスライムの締め付けが弱まる。

（攻撃に反応するという事ですね・・・）

どうやらスライムは攻撃するものに反応し、感知するとその箇所を攻撃する性質があるようだった。

腕を曲げられている際にそれに感づいたカルミアはブレードの起動を中止したのだが・・・



(ちよつと間に合いませんでしたね……)

実はカルミアは腕を折られる瞬間に自ら関節を分離させようとしていた。手足が機械であるカルミアならではの芸当だが、こちらの機能も正常ではなく、カルミアの意図したタイミングで分離できず、関節の一部が破損してしまった。

カルミアの義腕は特別製で感覚がある、それ自体もコントロール出来るが、その機能に問題があれば今頃激痛に苛まれていた所だった、幸い感覚機能は正常だったのので痛覚を含めた右腕の感覚を一旦遮断する。

(再生機能は大丈夫ですが、少し時間が必要ですね……)

そして再生機能も使える事は確認していたが、十分な状態では無いので復元するまでは少し時間を要しそうだった。



「…はあ…は…」

ギョッ
ギョッ

ドク
ドク

ビク
♡

グォ…

（こちらの方が、問題ですね……）

カルミアの頬が朱に染まり、息が整わなくなる。

腕を折られる瞬間、銀色の骸骨の右目から針のようなものが
発射され、それがカルミアの肩に刺さっていた。

針の先には肉種のようなモノがドクドクと脈打っており、
その内部に溜め込まれた媚毒を彼女の体内に送り込んでいた。



実はカルミアの体はこういった薬物に対する耐性が低い、普段は体の半分を占める機械部分で浄化力を賄っている。

だが今はそれらの機能が十分では無い。

「はぁ……ん……う……ちか……らが……。」

媚毒の効果か体に力が入らなくなってくる。

カルミアもこの体質に対して色々な策を講じてきて、現在は機械部の浄化力に頼らなくても死に至る毒物等の耐性はかなり高くなったのだが、快感を誘発する媚薬系の浄化は未だに機械部分を頼りにしている。

だが、現在その機械部分の機能が殆ど使えない、そして運の悪いことに浄化機能が使用できず今のカルミアにはこの媚毒の効果に抗う術も無く、媚毒の効果が急速に広がっていた。





「はぁ……はぁ……」

媚毒の効果で力が入らないカルミアの体がスライムに引き込まれ、這いつくばる姿勢を取らされる。立ち上がろうと力を入めるが、媚毒で力も入らずで右腕も使えない状態です。首と胸を押さえ込まれては脱出は困難だった。

「グッ！」

「ぐちゃぐちゃ」



「ふいつー!…んっ、そ…ん、あうん!」



びん!!

ぐゅ
ぐゅ
ぐゅ

びん!!

ぐゅ
ぐゅ
ぐゅ



ドン

ヤッ

はう...んあッ
ふあああ
♡♡♡♡♡
!。
もうだ...あ、あ、
♡♡♡

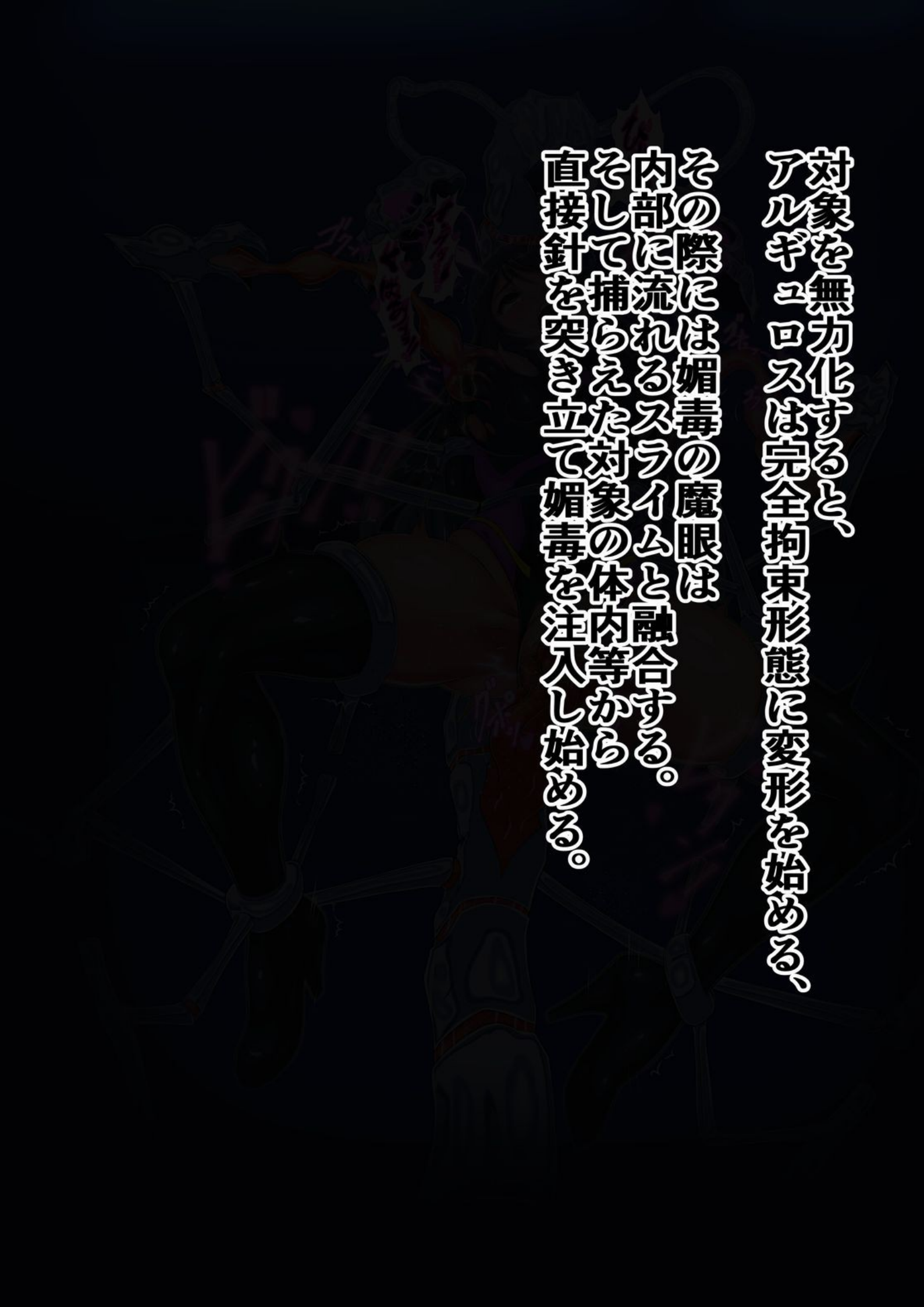
オステオン・アルギュロス

ラクエウス・ガーセクトに生み出されたアイテム。

虫のような外観で、強固な外骨格の中にスライムが肉包されている、スライムは本体から分離が可能。

額にある解析を得意とする魔眼で接地された場所の特性を解析し、侵入者の動きや体の特徴等を分析、その情報を元にスライムで罠を張り、捕らえようとする。

スライムには女を騙る事を得意としたマーゴの能力が付与されているが、不完全な状態で取り込まれているため行動が曖昧になってしまっている。だが、それが逆に複雑で柔軟な動きをして捕らえた相手を追い詰めるという良い効果をもたらす。更に2種類の媚毒針を生み出す魔眼を用いて対象を弱らせていく。



対象を無力化すると、
アルギュロスは完全拘束形態に変形を始める、

その際には媚毒の魔眼は
内部に流れるスライムと融合する。
そして捕らえた対象の体内等から
直接針を突き立て媚毒を注入し始める。

頭部が半分に割れると拘束は最終段階になる。

割れた頭部の中には媚毒の魔眼から作られた細い触手がうねり捕らえた獲物の回や鼻や耳などから侵入し、思考そのものを媚毒漬けにしようとする。

そして銀色の觸體に頭部を完全に包まれたその時、

完全拘束形態は完成し、

その名の通り捕らわれた者は

逃れられない完全な拘束の中、

解放されるその時まで身も心も全てを蕩かされ続けるのである。

トラップの機能として高性能が過ぎる
オステオンのアルギュロスだが、

この完全拘束形態への変形中は
強固な外骨格の強度とスライムの拘束力が
極端に、大幅に低下する。

それこそがこのアイテムの最大の弱点なのだ、

そして脱出を試みるならば、今のタイミングが
唯一逃す事が許されない時なのだ。。。

この間だけが、
このアイテムを打倒出来る唯一のタイミングなのだ――。